

メディカルカフェに出会って

東久留米がん哲学外来 in メディカル・カフェ
スタッフ 角田則明

患者の家族として色々なメディカルカフェに参加させて頂き、多くの参加者と出会えた事は人生の賜物となっています。昨今のコロナ禍では今までに無い生活環境下に置かれ、その事に折り合いを付けながらカフェのお手伝いをしています。緊急事態宣言発出後の二ヶ月間は施設が借りられなく、カフェは中止を余儀無くされました。カフェ再開後は他のカフェも同様と思いますが、我がカフェも定員を半分の15名にし、換気に気を付け、参加者にはマスクの着用、手指の消毒をお願いし、提供はお茶のみ、テーブルは使わず椅子をサークル形式にして開催しています。1ヶ月に1回でも出掛ける場所がある事は大変有意義で有り、外に向ける気持ちを持つ事も大事だと思います。病気を患っていなくても心を癒せ元気や勇気を貰える事は素晴らしい場所に出会えたと思いいこの様な環境下でカフェを開催出来る事は嬉しい限りで、参加者の方々に出会えた事に感謝をし、これからも参加したいと思っています。

患者の家族としてカフェに参加させて頂き早8年が経ち、最初カフェとはどんな所かも訳も分からず妻と恐る恐る訪ね、毎月参加し、初めの1年位は他の参加者の話を聞くだけでした。その内に少しずつ話す機会を得て、大変な思いをしている人は自分以外にも居る事に気付かされ、勇気を貰い気持ちを徐々に外に向ける事が出来る様に成り、今では通院や買い物に出掛けては、季節の花を見つけては心を和まして居るそんな妻に、これからも自分に出来る事は少ないかもしれないけど、寄り添いながら日常を過ごせればと思っています。

<編集後記>

星野 昭江

◇赤トンボが飛んできた。バッタやコオロギが足元に飛び跳ねている。カマキリなど踏みつぶしそうになる。暑い夏が終わり秋が来たのだとしみじみ感じさせられるこの頃である。

◇柿の木には実がひとつも生っていない。2,000個の実をつけた年もあるのに。また、樹齢90年の胡桃の樹は数えるほどしか実をつけていない。

◇コロナウイルス。この先、収まってくれるのか否か。再び暴れださないと良いけど。

◇抜けるような青空を見ている。北に浅間山、南に蓼科、八ヶ岳を眺める。悠久の時間が静かに流れている。それを感じ取れるようになったのは編集子が年を取ったからだろうか。日々是好日、良きかな！

がん患者の家族として

がん哲学外来ナース部会副部長 青木美由紀

二年前、言葉の処方箋の映画をがん哲学外来の方々と観て、樋野先生も一緒にランチをしていた時に、主人からの電話で主人が癌と診断されたことを告げられました。

その時から、私は今までのがん哲学外来のスタッフから、がん患者の家族になりました。「もしかするとこの時のため」皆様に支えていただき今があることを実感しています。「30分沈黙する、沈黙したまま相手と過ごせるようになりたい」相手が「愛」を感じる言葉を心掛け、相手の気持ちに寄り添っていれば、沈黙も言葉の一つ。

樋野先生からいただいた言葉の処方箋をいつも思い浮かべ、どれだけ主人のそばにいられたかはまだまだですが、いつも心掛けたい言葉の処方箋がある恵みに感謝です。

人と人とのつながり ～がん哲学との出会い

佐久ひとときカフェ 市川 強

先日、「ふたり集小諸日和第四輯」を頂きました。星野さんご夫妻の共著で短歌とエッセイ集が一冊に編集されていて、また、がん哲学外来の歩みも詳しく記されていました。特に2009東久留米のNPO「がん哲学外来」設立記念シンポジウムで樋野先生ご夫妻と出会ったこと、これを「宿命、運命的」と表現されていたことには感動しました。

私が「がん哲学外来佐久ひとときカフェ」を知ったのは、柏木哲夫先生が講演された「第六回佐久がん哲学外来研修会&交流会」の頃でした。家族と私自身もがんになり悩みを抱えていました。

そんな折り、地元紙で「佐久ひとときカフェ」の開催を知り、佐久市前山の「クアハウス佐久」を訪ねました。

星野さんと出会い、樋野先生の講演会と面談、各地のカフェ訪問、佐久ひとときカフェでは自身の体験も発表させてもらいました。

野澤監督の応援チャンネルにも出演の機会をいただき、「エッセイの会」にも参加させてもらって、人と人とのつながりが生む人生の広がりとしみじみを知りました。

先日、詩吟の教室にもお誘いいただき古希間近「七十の手習い」にワクワクしています。真新しいテキストを前に新一年生になったような気持ちです。